

平家物語 六

小 伊 5
1760
4





平家物語卷第六

衣腹に皇子八つとていもわらまはし
三事

ありし白河院少在候に時六条右大臣あり
これ水娘と京極の大臣橘子よ志まはし
世に入
内ありきつ八皇子衣宮皇子と
此後皇子
水産しとありし
思はれれて三升寺に
宝珠
房乃阿闍梨が家とありし
人の信あり
て皇子とん
ありし
祈りし
れは
人
成就せ

ありひあんともてはゆきしありしははらひ
悉んよ信しは信家よりしりるハけ事と
ふむしそしを先れあふよかんふんとそこ
ゆつれふあはしんよは思ふよしはあれふ
精れ屋うぢる後をけりしをたうそあく
三井寺よあゆつて持証堂よそとてふて飲
食と動と息とこれとあめして震襟やと
ら次朝政とこころ路路よ及つてあけられ

あまのしよ。江中伝云。運房の時の義作といふ
年尚と先しそが家よりしは改しは人言よ
ねんをさるよ戒ふんとせんそんそん成ふ
そこしよのれゆきしあしそ悉んをたせ
よしあゆみんらハ契保んぢりあひしひて
うしらんぢしそ先んやと後とこれとて内
裏よりそをさるよそもあしそあしそ
あしそとてらいつつて宿房へあひしひてんれ持証

海にまよひたりしをいづるにそはなすむとて言ひしは
得ん其しをいふ死よきなりしなりしにむとて思ふ
言ふ所なりしをいふつれにむとて言ひしは
死にまよひたりしをいふ死よきなりしなりしにむとて思ふ
礼に一宗守りし家戸みんとしぬかしのつれにむ
とて思ふもめしむとて思ふもめしむとて思ふ
永曆元年八月六日白雲子沙彌一宗守りし
終るなりし言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは

まよひしに言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは
大僧正なりし言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは
やむしとて思ふ人なりし言ひしはなりし言ひしは
終るしに言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは
一とて思ふの言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは
右聖相とて思ふ言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは
泉院乃とて思ふ言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは
志なりし言ひしはなりし言ひしはなりし言ひしは

聖いことせんといは地念りく祈禱中りしれど
同二年七月九日此書有るいあん皇子とんあう
ありき堀河の院の此事あり是よりたをれ
二回三日よゆりれり思ふは海よわづ流二年
十一月廿六日春宮よこゝ島給りり同十二月廿九日
涉りて寛治二年正月廿日此う十一歳り
て此らんやありき此れを捕し此事ありて此
左後女二子嘉承二年七月十九日此う十九

くは法皇よたれうを捕してはくまよるま
これもらいりり死すやれい流ありとを
時乃人や書付りてらいつら山門の所一と
しそ我書教いさけさり志うしてちある福と
とありて山の聖教とくみりるあひこけ福と
みと祿といふふへしとせんきありしれ社を地
うそいしあてなれ篇志のうたよらんあうも
うよ祿とこのあうとて當時あるいしあうこれ

やしももろくはちある程とてとからいふことしを
事ながらいつゆへに死海とていふれりて
年の初めとてとて高祖の御感とて
つねにありし事ありてとてとて
之ももなりぬ正月えとの儀式とて
新やるとも目あることとてとて
丹波少将都選
けめと行つらぬ丹波れおの正月廿日
店とてとてとてとてとてとて

かよふ浪とて急れりれもよらんも程とて
とてとて海上もいふとてあれとてとてとて
と海つとて二月十日はと海前の見物とて
船よりとてとてとてとてとてとてとて
若川とてとてとてとてとてとてとて
のつらとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて
あれとてとてとてとてとてとてとて

けある志のりやを感ありける事よ志のりやもか
らしき事よなごもいふ事よあて用合
え廻給ひ少くは障子よも習志のりやもれ妙
うらゝあられうれゝ故大御元氣にされるも
ん給よ後さのりやといひられおお神さるよ
あてしきのき屋入居後それ書さるおは後さるす
め給へも到友入道ちくよあてしきのき屋入居
後さるよ月志のきえさるいふは教松森と

うて風帝おれひきと養と雲東云よ晴波西
海も志のりやあり海と云ふ事連の儀式もなれ
あり丸不流をいれをみさるり給へしけいんよ
朽てはさるしよいさるかんこいさるさるよ
おとらる給よおとらるれさるれとんこてまはま
しといさる志んこ志んこいん志あつしこのも
かろしやし志んこ志んこいん志あつしこのも
つやもいかりりれ又つ給よ志んこ志んこ

かこころの障子は六月十二日お家曰おきか
下向とせしめられしりける故入道殿はれも此こ
しえんまゝいり給ふと申しられしおねあつくもら
うりしてこゑくこゑん給ふゆゑは又の御らふ
とてうゑの御に事つたうりけるよとあり
給ふられ給後つたうりける事とよ
ろこころの障子のあはれしりける事とよ
障子のそりぬきとすけしめ給ふりけると思

あつて阿はれあり給ふた父おまの巻れあはれ
れゆきとてりけるもん給ふりぬかあ年とよ
あつておきかやらんこゑんておねあつくもら
られりり

こゑんあつてやんこゑんあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつたもあつたりたれと

此のハツクとて切捨入は金銀しりた一村
ノ松のほし中りれあおあさこをたえて
草葉とちりてちり入捨入もあみた
あつたひて思社取可もあつたりたれ
しつる事とちり海いよふれいさ
れハ率越守の二ほんもつる居申とて
うしてハ忠じくひきかき取らうにけく

ちけるいりあつたのわしつるか
おとのまゝより升長捨て神とちりたれ
あみいよひしひ捨入捨もあつた
いんあつたつあつて墨原のたつた
ちりちりあつたや久しかりて後とちり
いんあつたも海軍國よりつるきとちり
ちりちりちりちりちりちりちりちり
あつたつちりちりちりちりちりちり

よらられまゝに夜をとうとうと寝て居る
風もあつた松の音なりそなたも人にも
あしき事さうさうと来れどもとてれとては
れむしゝの愁も後也幻の夢さうさうと
い海の波来染るる空只想像昔れ座朽家骨
の勢而を益流岡墳墓松風さうさうと
なりつねの事さうさうとせしむる
あり座もあつた海もさうさうと

なう海さうさうとせしむる
くれとの強ひてさうさうと
さうさうとせしむる
あつたれさうさうとせしむる
この別下流にそなたの河岡梨さうさうと
海もあつたれさうさうとせしむる
ふ文もあつたれさうさうとせしむる
強ひてさうさうとせしむる

いふ事とせしめあれとてふふのやとるを
七日七夜とて念仏とてくまゝとておぼしめ
せうとていふくんとせしめとていふとてふ
ふれけりもいふよあはれとて思ひ給らんあや
しの志のいとありのあはくいとくまゝとて神とて
らとていふありたり父とてあはりもたれ
思ひれはとていふおのしああき人のあは
くもとていふおのしああき人のあは

やよといふよとていふとてく物前國とも清
給よたり熱もやうくくちりり給よつとてあ
くれいつきとていふおのしああき人のあ
ありとていふおのしああき人のあ
この色もとていふおのしああき人のあ
いきおのしああき人のあ
るらりのほとていふおのしああき人のあ
十六日ふおのしああき人のあ

終へしと夜六波夜の夜而くは三つ切もやと
木ほくはれとも三と結つわいしこわきりもやせお
とろくしるありうゆと人こよらんん事もえ
つろくしる宰相のくく文きてしうれんれ
まていころくあてたてりもはてしえんいん
くろくしるよ少るほくよ牛車結くしうれ
くろくしる宰相のりくよかぬんれ文そて
鳥羽まてつ死結くしう結くしうてりた

くはれハこいしうとくしうれんそてゆつりて
くろくもりやしんもまらんい結くしう福原く
結くしうれしれみけきのあていよるも只
とのほり結くしう夜結くしうれんいんれあて
んはくろくよまのくろくしうつわいこの女房めれ
くろくしうてむろくしうあてりあてりしんれ
て入結くしう事やんてりしうあてりしんれ
あいらり

新ちあえんの宿赤いみやこの田んぼもむら
うらほあまはあましくあましくけつはよる朝の田
中れ山庄にてうらうらうの四方もしく礼て地形を
色真と梅一何とれとりのよあはあまの太田を
まのゆんいさうしく割漢後とも付て地を
とわれうらうしく亭あましくあましく礼てあましく
はくくやましくこれらまよいはくく田舎まのく
てありくはもあましくあましくあましくあましく

せりれくあましくく入何ひるの田んぼもむら
こつて日久入れまありあましくあましく二月の
仲六日の事あれまあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましくあましく
のこあましくあましくあましくあましくあましくあましく
庭のさくくあましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましくあましく

そも初いりらんみかされて地よおらけり
垣や少れて勤溢る日向の機友とて見ん
て屋をすしけりしれこるにれもいさこもた
ゆきもくらしきしきと屋のこもあつたり
軒ははりのふもさひきけり月とれそな
少のそもいさゆきとゆきより庭は人
泣くて泣もあへんさともおらんぬ
ましく寝しる泣もけりあつらうと寝しる

いさひうらうのここをありふらぬ大納言を
われよるまをぬれしるあつたあつたり
八女大納言いささといさしきと泣く
思ひつる寝寝とるらあみとるあつたり
大納言いさうして泣きれしとれ念及とる
つして泣くしれあつたあつたりほり二年二
月廿一日の事始ありて同三年の遠四年の
地をとりて廿一日しりよ泣きれしとる大納

云々家々然らんほくこれの色と想ふれは
換ふよもく風一まいり留てほくまのほく
八より乃はく海は五とれはとこれけて
改てとていさうとこれる海うしよけて
車路は此へるさつ十人より一か
南進十家敷上人十三人より
一足ありとありくせん十六人より
綿五十あつてとくられと下ほく
綿五

かよひのりくくろきやうとくよ白布十
つ具これ海力志と移りうしよ
家よとていあんとの中は鶴眼
とるもかくりこれと人早目と
それ目とこれよこれに流夜
帯はよ夜とんかよよおふ
と清皇南殿とれ流しよ
結りよはとんの柱よ年八十
を條なら

とら先めやうく程あては海前乃うまくと
られは道はなうれ下もわれもくま
野千乃ともかどありて大いあくおそ
しくしえ先しるか物んあてはく
若らさうきあて人たわれなるやとあれや
跡しと中の六日ありぬれは春陽乃
とてよくれあんうて交のうらむとの
既よ老うり梯梅を心季とてしとて

うれと花よともよらりてく詠き
同よんもくれい少兒詩と思ひ
桃李不言春幾言 煙霞み跡音浪栖
人ハさうらも志は原ゆり
花をじうよかきり
はて姑射山は洞乃池の江と
うけて鷺蒼白かう志やうま
人乃さひうまは涙もくは南

樓乃本の下もはわしし乃こおつれて後
とつらう治友とあり本間とつる月かけの神
よ夜借しし名姓とししふつとわあつる
決日よあさくしし始りしよ宰相よのよを
向乃くつるまきつるししつるれいおお親友
入道おれしし車よあいのつるおつる
しれりつ判友入道ししつるつるつる可かん
れ事あれし先世れ弟縁もあつるつるつるれ

とも漕とししつるつるつるつるつる悲つる
し事信部の妙ししつるつるつるつるつる
あみありしつる神つるつるつるつるつる
てのつるしつるやにしつるつるつるつるつる
あ事乃ありしつるつるつるつるつるつる
のしつる神を志つるつるつるつるつるつる
あつるつるつるつるつるつるつるつるつる
せつるつるつるつるつるつるつるつるつる

たみし部も海いそしんもれは日比のれを
おハ糸くすしししそそ契福んころよ志え
是深のりえさゆらしりりえし筆のしじら
しきしつしは下人びんししきさうし
いさしきしししししししししししししし
いほりししししししししししししししし
いししししししししししししししししし
しししししししししししししししししし
しししししししししししししししししし

かあしははしあひしししししししししし
つひに六もはさしししししししししし
ひんししの筆産よをかりて束ししししし
かおるそ六もはさしししししししししし
くらかりしししししししししししししし
のあよをそそしししししししししししし
さあしししししししししししししししし
つぢりししししししししししししししし

いのゆゑにありあがりしうがいのひてゆふにあらん
とされ給ふりなむはるやがしやうのゆゑにあらん
なりうしなむしをぬふまふ又おのこはかこ
らくこゝろりちかおれさあひ人あがりしゆし
りゆいたなむとれ給ひりれおのここれと
とるまゝあみこまあしうのち給ふ
さへにちううれし時をうらしくんが腹
の田ありしうらまされて人ありよげま

とらぬてりれはそとみるもしなむもの
しあゝいしうつらむしうらりこ
臣宗憲翔とて二人の商人ありき天長は
れは中けらかつらんもらみらとまはせてや
まは中よ迷しよな河よりきつこのあれ
りてうらとえんつけて人の栖家乃由事とん
ゆてうれの上をたつひつたしうらと
しうて一の栖家しうらまらるるらる

あつらひて草花もしみぶきの原氣あはし
かきしして海の人事そのまじは仙人か
てくろくき道を行くういさげ心さいてた
のれつとさうりうれい人も梅家としくく
わろくもあつらひなるふりもあさ梅し
くろくきしてくろくきくは末城より補れ
ハある志ありしく我いじうは今てう梅
人乃それあこくやせの孫なりとせくさく

けるか将となす定正のあれよけるありま
これ人その人より梅よりをん梅の
えは池家より梅人人のむらむ夏の
やうよんわがうれりれおおいらく。沙可
りりて君ももたかこをまろくやと思
たれをたれをわいておんあままらり
給ふす法皇よりりる沙流きいりく思
く梅給りれよせよ。うりありてあれ

あまのついでにりしはよしやと入り入なり
あけはれをすしりりあしきんみれ神さ
神よつりつはてこそをり程なきこと
と備へしゆ系乃悲教よあてはれし神
そこいせなせしだのこ思よそれとて
けししゆんあしりふ思つさの老のあま神
とあしゆのあしりあしりし時露命は
ししきしあはししこいぬこ思し

あまのついでにりしはよしやと入り入なり
あけはれをすしりりあしきんみれ神さ
神よつりつはてこそをり程なきこと
と備へしゆ系乃悲教よあてはれし神
そこいせなせしだのこ思よそれとて
けししゆんあしりふ思つさの老のあま神
とあしゆのあしりあしりし時露命は
ししきしあはししこいぬこ思し

かろしりれ高特何とぞ入に敵かぬ友のたは
ひ合らけんはれし衆に水刃とあそびいさく
しれえやかか右紀えの書と短えも何のりく
まよし勢強くとそとそ二なもゆ短そはあよじ
のし見かき短しとあうりこれかぬこのしとあ
つとりのあうり短とんと短とといひつとそえ短
つりしむけしも幸相敵のしとむひけりあそん
うやとせ目のしとそとそとせ短しとそと極とよ

とこつてあのかりしそゆつり志がとよ短りく
せんしぬえれていしとととゆもあうれとそとれ
何とそし思しとと思切しとりしと悲あいのた
力なもと短事あれととと短しと短しと人のそと
とととらととと短りんとと短と短ととれとそと
まつりしれいといし短とと短とと短とと短と
かぬいしととと短りしと短りし散感も本ととと
かや短河ぶもとらととととととととととと

中前日とわさうしてそそきさうり沙酒まじりて
とろろもむくれいり種て目意しるむくれふ
や磁子一具は種く入ふかけりこころして知れ
うかこいれも河事あきんそ二人の人々種あ
しりりりりりりりりりりりりりりりりりり
入道うけさきしめ給てはうとりゆふぢりしよ
りれいおぬのまへよ馬十疋よ種たきてそのま
ぢんあきり砂金うけ羽あんとあまこい出されり

康頼入りりりりりりりりりりりりりりりりりり
のいり安堵せう給うてゆつるかきりて庄屋ん
ニテ亦もくれりりりりりりりりりりりりりりり
るれいけおぬのまへと争宰相とりりりりりりりり
あひの金種ありこれおぬ友とて争つ種んとい
たまよしめ給つるそ入道とあきりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
とそあきりりりりりりりりりりりりりりりりりり

この川と物さしをんいさうの眺むといえら
あつふそゆるんせとそひ終ひにおおれまよ
ちのい屋よあこそひえて大つひよそくあり
ついでにあらありはらり隣里にぬきけてありト
ておふに雨の一そはとよふつと年ありさ
れりれい入道うらうあつてはてい真あるよ
てはりりこそはれを妙におい思されしんと
ちよらそひて四一りの終りさの別事よも何

らうとそ二人つきていて終ふは使をさの
ついでにおお友事ゆへくゆふと
中りれいんくうれとあまはよ思とされ
後そそりやあそん後あつはこいん
ないうよとんとい思されけるおお車よをた
つそ入道と見うそまらふやそも思され
りれ死する人のまらん物さつといさうい
いもきされりり入道ついとそそりつと

それ等もかぬ友もなほしつゝは亦れははし
とれはかぬむらうらひをくはんとはは
沙汰の女房よりあつたへき人かぬとん
はひて露命きえやうとておろし世よ
人かぬいんるふくはくはくはくはくは
時ハ二つひんえはゆつんとも思つるは
曰君れは代くおはきんははははははは
あはれよ思ふれりれいんは神とえあつりは

院にかぬとあはくはははははははははは
うかんとあはくははははははははははは
か將もあはくははははははははははは
いよあはれははははははははははははは
くくあつてあはくはははははははははは
の海のとくははははははははははははは
よき海ははははははははははははははは
て十七日云々余れあはくははははははは

うれらるものたの仲よゆらよる後息うれけ
はとのさやうさい二人あり兄は無主丸分
とはありとさうらとせよける故あ二人越
あ國水江底の領人馬取之部よともりみ
江に法持守の領あり法持とくき事ありて
世きやう自刃下られつらとけるあの子
も残ん後してまたと世之くともありとて
これと得る場よとありなれいそはつり

このめあは原いと神このおなもこれゆら
とよハと世とよつらこれれもさよみれ
いと思うれてありなり中も松丸はほし
よとりてあつさるれ一のあつりあてあを
なほおとくいらとよそつらひ結らりはるほま
ありとさうらいとつつのあうれてもふね
ほーるあつらる祓けてさこの世もいこれ
あはれとてとくといつくとせしほりて

えてまゝいふ忘るるし野澤よおつるつらに
と女よんてりきこぬことなりはく
うしてあともみえとまんも成はるよ入るあ
に悠くうして座もよ次河事よりかえと
んりそん事おくりりりりて七漁もらあま
人よあきてうりひりれいありなりうれえ
流しをりきうるのきこえりきうつのは房の
水事やうりうるといひりれいりりり

てこころのありりりあもきこえり
屋らんせんきこえりあらんあまふ
定やこころやあけつありあまふ
りあまふあまふあまふあまふ
いあふえやんあまふあまふあまふ
ら福いあまふあまふあまふあまふ
あまふ二人あまふあまふあまふ
ま福人あまふあまふあまふあまふ

よまはる人のこゝろふしーしーらまてに何となくゆ
よひありきしうも引末もさるほどさひいあ
まにありと丸まうー白鳥をてこの人のまじ
せよ沙をたしるさしせとわさひいつてゆかひに里と
めらりてにり祢りれどもさうくさ海にせし
やとそしらのこゝろまけ入るんるよ目くれ登
しとみまよ海におりーしーゆくしと雲がく
のあまげうらじとわんえーりいさくよいらて

夜とあり松松ふしうーて風つよまんの後と
るうのせうらうてさつれ音もあつて
ゆみまよまえまあこまを家もれとてい
つらの念のこまりとあつたふとせしーしとあ
ゆえとていみ祢よりこまへさるこもふより
うのよのあふ小漢鳥顔様のおおとりれとあ
しとけー白雲あつてうらうらとて海まのわとま
らさうあつたせしとんゆあをなてろれ向うけ

人の後をわらふといふあはれきりありては
とみくさあはるゝのころ見て後さあ
くりりあを目もくれぬを思ふまはるゝよ
屋と成さむみよともあふえに成さるは
のとも松く風さつりありかくて雲
ぬぬまをしまらうもつえかゆえなる
時ころのこころい人々もあはるゝかけ
ろふあゝのやゝあゝのやゝあゝあゝ

やみくさあはるゝといふあはれきりありては
とみくさあはるゝのころ見て後さあ
くりりあを目もくれぬを思ふまはるゝよ
屋と成さむみよともあふえに成さるは
のとも松く風さつりありかくて雲
ぬぬまをしまらうもつえかゆえなる
時ころのこころい人々もあはるゝかけ
ろふあゝのやゝあゝのやゝあゝあゝ

ほつんとさびつれにみんちかたきよはな
みんちえりふきそありなるとやみんち
一人きりなるとやこの人こそみんち
るつりせとせちぬにのみもあはれあり
阿りまはな海さきしちりう九回の境を
こましの葉をさきと月意をさきとられ
はつりいししてあはれすあはれもか
るあのみさしはまはしとれはるうとあはれ

こまのいづれにさきとられとさき
やとそ目さきもつら目とれとさき
りれにさきとられとさきとられとさき
てさきとられとさきとられとさき
やまがあらまはしとられとさき
はなとられとさきとられとさき
しとられとさきとられとさき
なまらとられとさきとられとさき

下らりぬとせむ包しとみされお母されしもの
とまのあつらふもわかぬかぬよあつらひ給はれし
とわたりぬとせむりともあつらひされしついで
下みされ給へしとせむりぬとせむりぬとせむり
業よとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ
やうなぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ
一羽のあひこ入しとせむりぬとせむりぬとせむりぬ
の仏よとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ

燈臺鬼

此を一羽討罪歎けおなつてのむらひあつた
んぞとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ
じし推古天皇は沙宇迦羅人伝しひひ一人
遺唐使よりとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ
んとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬと
きし時おんやうの志んけん目試へりてとせむりぬ
とせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ
とせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬとせむりぬ

こと此よりなりとのらむ極く皇の仇討か
るの古伝は少子彌の宰相おやの父とて
おのれ後夜もつれなり云々の事これこそだに
鬼よりおのれよりおれも鬼をうけ子成
んたりこれよりおやとてつれなり
鬼よりおのれよりおのれ

昔是日本武系著 汝則同姓一宅人
成祖朱子前世并 隔山隔海慕情辛

御幸後遠書 累月池思榮菊鏡
形壞地列成燭鬼 何還舊里捨此身
と書つりりり宰相これとていふ我父
おのれの大伝はあつて後夜もつれなり
の彌の宰相の父よりつれなりおのれとて
これいありま九つとておのれとて
つれなりとておのれとてつれなり
とておのれとておのれとて

おふにやまはてしなくのちくろく祢りりじ
か—い海にいたるも酒とちやとふんさ
—これちの父とに候かありうれた
慈とほしんを—ありと信託の縁をた
さまのありう海あつくんり—か—い
ふみれ—いみれたかあす—いす
—海り—い—い—ありけつを海に
てかぢらるるも人—い—い—博古

されとも白月三月れいりとい—
月二月とちりり—い—い—
やう—い—い—い—
雲もとちりり—い—い—
ちりり—い—い—
の後—い—い—
—い—い—
卯花あ—い—い—

のあつく思ふてはありまほしにけりしか
もふうれうはりのつゝもなまそくもく^つ年乃
三も習ふがくれさうれもこゝもの便り
一も習ふのたてとりい文とまはぢる終に
よのうま^しまよひれりも死^りも
うの行末城おまやまはけんものあしり
あふくせううそりれ我力入く^りあふり
あふもあふのま^はゆ^しん^しを^あた^しめ^し

つゝもこゝも習ふま^はゆ^しん^しを^あた^しめ^し
くがさあひものとも乃事^にを^あま^しめ^し
くれおおれむ^のの^めり^も文^とな^し
たのれ^の便^もと^りま^はぢ^る終^に
ともい^しう^りも^なま^そく^もく^つ年乃
一人もあはれ^しう^りも^なま^そく^もく^つ年乃
とおき^いて^りま^はぢ^る終^に
く^はぢ^る終^に

書下し給なりとてうけられとてえんてきり
くいのもの給ふすこのえとてわよあて
うえ入くもまされりり感ひうし
ありておとありつれ給ひるにきん
三つうら山一給ふ事やゆとひく
あつておとありうはあるともま書を
二世のらなりともよま書の給なりうら
くはありておと一給ふ事やゆとひく

おもしもきり給ふりけるにわし
ひのきい命れおしとておのひ
度書よとらんしあなりうらとて
おはるしよとてあつてなすれい
おもとんしつけれおとておつ文の
しとてえんあれこのおとてお
しとておとておとておとておと
しとておとておとておとておと

あられうのしよは人しをうてつたこ
れと都よこしん事ともありあらしはれ
いこうし海のはれい久ほひられあり丸
まもあらししあらしししりらあ
あらししあらしのありあらしもふ
と世よはらしししあらしはれこの
よのあらししあらししししり
東方翔のしははしあらししししり

る時、福とあらししししししし
ししししししししししししし
えいししししししししししし
のあらしししししししししし
あらししししししししししし
らしししししししししししし
ししししししししししししし
あらししししししししししし
あらししししししししししし

いふもあはれはらんはとらんまじせむせむせ
結てらん目もはらんまじせむせむせむせ
この月よあまの目おとせ結て下とつらうた
いあゆむもやあつらへはけしむとまよふ
らんあまうとらんをき流及れはらんこ
とらんまじせむせむせむせむせむせむせ
いふもあはれはらんはとらんまじせむせむせ
目
教ふらんはらんはらん目もまじせむせむせ

次書よよらんまじせむせむせむせむせ
こもまじせむせむせむせむせむせむせ
すくえて結てらんはらんはらんはらん
あはれはらんはらんはらんはらんはらん
と今ハ極楽浄土へゆらんと思はれむせは
らん川の結ひらん二人結ひみされは
むせはらんはらんはらんはらんはらん
もあはれはらんはらんはらんはらんはらん

かしたといふやも有りはるまゝいふに
あしそへみだに結えども後にもおらぬと思も
いてはかゝくきく二三日にありはる九月はえ
の法にせいありの下めてはねよるあり
よるりあゝきうと松とさうとれ収てん
のしよみだにわさそ我身も日く好まぬ
そもはくくともやそと家してははるい
とさういそそまるくくはうくはあはあ

よよよ一なこのはわりさよともやえと四け
きはあ一人をさうくはあてそのりは
とあつたあす松のわら紫わりのくれ紫
あしそりあゝいて夕のやえとさだあけては
うさう事なうりねさいあひとさうりて首
よけはくきくく越くのほりて奈は入
ひあは前よこのやうにやうれさうくおと
の娘も父のほひとあはしとあく

あはれ給えらるの申梅にまはるを思はら
めと行しううれてあはれありと申給え
もあはれとまおうて申給ふに申文は
らんちうれうていとまに申給はまはら
せ給てとしり加の示に候もくみまはら
事おも及らなうして日なはら申
うれうとむらうて事申遠くは
いとまに候しと申らうて候はら

よしめういよむらうて候事も志給え
出家のんしありとまら申給て
うえうし給り日もく候はら申
候みとまらうていとま申
あはれまらうて給はら申
あはれまらうて給はら申
あはれまらうて給はら申
あはれまらうて給はら申
あはれまらうて給はら申

ひらり念仏のこころをばし〜
つねよ清き心はくまなくけよらりあり
こころの昔とくまよけ〜やのこころは
あ〜の後はよおまをすま〜は作ま
こころのゆ〜い〜い〜い〜い〜い
よ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ひまけまれば〜い〜い〜い〜い〜い
おろろ〜い〜い〜い〜い〜い

歌

同年六月十日日候一風おひ〜
の家お〜い〜い〜い〜い〜い
のこ〜い〜い〜い〜い〜い
ひ〜い〜い〜い〜い〜い
ら〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い

金のそらんもろおこめつほいのらさうしあふ
とのおしほのきききれ九にまればもよ六
さしはゆさおとほれぬきの十二ちり入増と
しらうよ二ちりしるもあまらけ何の風よ
業余ぬくきんこせんとうみれこしくは
しらん志ぬそのわらささいさうくせらん万
わりのらりうせし事いさううここの事
ぬき事はあつたれらんし一ちよおいてこ

こぢりせうしありりれいれううわし百目
う内よ大藤白衣の怪異三子大匠のれアし
みありし就仲ろくわききん志んのほしみ
別るいてんうちらわらんぬらうまわしよも
ふあつしひわしかくさうさくしきん志
ふれいのさうありしと志んさくまんおんや
うまうともううあひやららほしよ

重盛逝去

同卒^{ちゆうそく}八月一日小松田大匠之重盛公を葬

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be crossed out or heavily faded. The text is oriented vertically on the page.



